

ヴェンクとクザーヌスにおける知的態度の差異

—Vacate et Videte 解釈を通じて—

川崎 えり

序. 問題設定

ハイデルベルク大学神学部教授であったヨハネス・ヴェンク (Johannes Wenck, 1396-1459¹⁾) が著した『無知なる書について』 (*De ignota litteratura*, ca. 1442-43, 以下『無知なる書』) は、ニコラウス・クザーヌス (Nicolaus Cusanus, 1401-64) の『知ある無知について』 (*De docta ignorantia*, 1440, 以下『知ある無知』²⁾) を同時代に批判したテキストとして知られる。他方、クザーヌスは『知ある無知の弁明』 (*Apologia doctae ignorantiae*, 1449, 以下『弁明』) を執筆し、これに応酬した。

二人の論争に関しては、既に R. Haubst[1955], J. Hopkins[1994], K. M. Ziebart[2014] 等が詳細に論じ、本邦においても八巻和彦[2001][2016], 佐藤直子[2005], 島田勝己[2012]³⁾等の先行研究がある。本稿

*) 本研究は、住友生命「未来を強くする子育てプロジェクト」第12回女性研究者奨励賞の助成による成果の一部である。

1) 生没年は、K. M. Ziebart, *Nicolaus Cusanus on Faith and the Intellect: A Case Study in 15th-Century Fides-Ratio Controversy*, Leiden, Brill, 2014, p.53 参照。但し、Rudolf Haubst, *Studien zu Nikolaus von Kues und Johannes Wenck*, Münster, Aschendorff, 1955, p.86 では1460年没とあり、過去多くの研究がこれに倣っていた。

2) 訳語は一般的な邦訳に準じたが、八巻は「覚知的無知」としている。ヴェンクは、doctusを一貫して「教説」ないし「学説」という意味で使用しており、J. Hopkins は scientia と同義であるとしている。

3) Hopkins, *A Miscellany on Nicholas of Cusa*, Minneapolis, A. J. Banning Press, 1994, pp.3-38, 八巻和彦『クザーヌスの世界像』, 創文社, 2001, 「7 中世末期, 脱大学の知識人——ニコラウス・クザーヌスを中心に——」『中世における制度と知』, 上智大学中世思想研究所編, 知泉書館, 2016, pp.191-222, 佐藤直子「クザーヌスとヴェンクの「知」と「言

はこれらを手掛かりとしつつ『無知なる書』と『弁明』の解釈を通じて、両人の真理探究における差異を、ヴェンクが詩編より引いた「空であれ、そして見よ、私は神であるのだから」*Vacate et videte quoniam ego sum Deus* (45: 11) を軸に提出することを試みる。この言葉の対照的な解釈に、両者の知的態度の差異が如実に現れているからである。

1. ヴェンク『無知なる書について』

ドイツのヘルンベルクに生まれたヴェンクは、パリ大学のアルベルトゥス学派のもとで学んだのちに1426年よりハイデルベルク大学で教鞭を取り、1432年同大学で神学博士号を取得した。彼は生涯に亘りこの大学に留まり、1435年、44年、51年に学長に選出されている。同大学の唯名論者たちに実念論を紹介した人物として知られ、「同時代のハイデルベルク大学の神学者の中で最も重要な人物」⁴⁾、「パリにおけるアルベルトゥス学派の傑出者の一人」⁵⁾と評されている。ヴェンク自身は、G. Ritter[1922]⁶⁾によりトマス・アリストテレス主義の講壇哲学者を自認し、伝統派 *via antiqua* の擁護者という立場を取っていたとされる。『無知なる書』執筆の経緯には、バーゼル公会議(1431-37)においてクザーヌスと政治的に対立したことに加え、もとより当代の異端思想への批判活動に熱心で、この批判書もその一環であったという背景が指摘されている⁷⁾。

『無知なる書』の構成は、前後半部に分けることができる。前半では、『知ある無知』に対する自身のスタンスを素描しつつ、「空であれ」を掲げ、クザーヌスがいかにかこの文言を軽視していかを語る。後半では、

業——両者の論争をめぐって」『哲学科紀要』、第31号、上智大学、2005、pp.25-57、島田勝巳「『知ある無知』の争点とそのコンテクスト——ヴェンクとクザーヌスの論争をめぐって——」『天理大学おやさと研究所年報』第18号、天理大学、2012、pp.63-81。

4) G. Ritter, *Die Heidelberger Universität: Ein Stück deutscher Geschichte, vol. 1: Das Mittelalter*, Heidelberg, 1936, p.390 参照。

5) A. Gabriel, "Via Antiqua and Via Moderna and the Migration of Paris Students and Masters to German Universities in the Fifteenth Centuries," *Antiqui und Moderni*, A. Zimmermann ed., De Gruyter, 1974, Ziebart[2014], p.51 参照。

6) Ritter, *Via antiqua und via moderna auf den deutschen Universitäten des XV. Jahrhunderts*, Heidelberg, C. Winter, 1963.

7) この段落に関して、Ziebart[2014], pp.51-60、佐藤 [2005]、八巻 [2016] を参照した。

『知ある無知』の主張を 10 のテーゼ *conclusio* とそこから派生するコロラリー *correlarium*⁸⁾ とに纏め、順に論駁する。整然とした形式である反面、激情に駆られた罵詈雑言が多く感情的な言表が多い。

1-1. 『無知なる書について』の主旨

ヴェンクは、『知ある無知』をロラード派、ウィクリフ派、エックハルトおよびシュトラスブルクのベガルド・ベギン派の思想と同列に扱ったうえで、偽使徒 *pseudoapostolus* による異端の書であると糾弾する。しかも、神学上の諸教義を破壊する危険なものである点でより有害だという。彼にとって、『知ある無知』の基盤となる〈反対対立の一致〉 *coincidentia oppositorum* および「知ある無知において、把握されえないものを把握されえない仕方では抱擁する」 (*De docta ignorantia* (= DI) : 263) という事態を認めることは不可能であった。

「空であれ、そして見よ、私は神であるのだから」は、この書全体の主旨を表明する言葉として用いられる。ヴェンクによれば、この文言は己の好奇心や虚栄心、我々を得意がらせる知を捨てて自己を空しくし、神へと従順に向かうことを命じている。しかし、クザーヌスは己の思惟を徒に展開し、この命令に背いている (*De idiota litteratura* (= IL) : 20)。ヴェンクの考えでは、〈反対対立の一致〉は神と被造物とを同一視する異端思想の一端であるが、神と被造物とが明確に区別されていることはこの詩編の言葉から明らかだと主張する。神が「私」と言うとき、それは神でないものに向かって発せられているからである。そして、神と被造物を含む多様な概念を一致させてあらゆる区別を破棄する〈反対対立の一致〉は、そこにおいてもはやいかなる差異も矛盾も生じえないことから、一切の反駁をも予め退けようとする狡猾なものであり、ヴェンクの目には危険なものに映る。彼にとって重要なのは、真正の預言者と偽預言者の区別、正統信仰と異端信仰の区別にあり、これらを判別不能にする教説 *doctus* は退けられなければならないのである (IL: 20)。

同様に、「知ある無知」も棄却される。「人間は、把握的にという方法

8) 「テーゼ」「コロラリー」の訳語は、Hopkins に準じた。一般に、「コロラリー」は「系」とも訳されるが、佐藤と島田は「付随的帰結」としている。すなわち、或る「テーゼ」から導き出された、それに属する新たなテーゼが「コロラリー」である。

や像においてという方法以外の仕方では、何かを把握することはできない」(IL: 21, 1.14) が、他方「聖書は、我々の象徴的なものにおいて、神の力によって吹き込まれたものと啓示されたものとを、本性的な我々の概念 *conceptio* のならい *consuetudo* へと伝えている」(IL: 21, 1.17) ゆえに、そこに無知はない。従って、「把握されえないものを把握されえない仕方では抱擁する」ことは、まずそれを目指す必要がないうえに不可能な事態であり、かつ人間の能力を超えたことを為さんとする不遜な試みなのである。

このような彼の知への態度は、『無知なる書』という表題の説明においても窺い知ることができる。ヴェンクは、『形而上学』を引き、「論理は、知ることの手法として、知られたものについての推論 *discursus* によって知られていなかった得られるべき知 *notitia* へと精神が至るよう導き、教える」(IL: 22, 1.29) としたうえで、これを「論理の務め」とする。そして、「理性的な推論の出発点ないし始まりあるいは始点は、知られたものであり、他方、終わらないし目的は未知のものへの明示である」(IL: 22, 1.37) と説く。

また、この表題は『知ある無知』と対照を成しているが、ヴェンクによれば、これは「イザヤ書」と「詩編」から得たものであり、そこで「無知なる書」は闇の中にいる悪しき知恵者たちから知恵を隠したという (IL: 23)。ここには、クザーヌスが偽の使徒であることを強調し、異端書『知ある無知』を反駁する正統な書として本書を位置づけたいという意図が見られる。「多くの偽預言者たちが世界へと出て行ったのだから」(IL: 20, 1.30)、「あらゆる霊を信じるのではなく、それが神に由来するかを吟味」(IL: 30, 1.29) しなければならないため、その仕事を本書が引き受けるというのである。

1-2. ヴェンクによる批判の要点

後半ではヴェンク自身が要約したテーゼとコロラリーを順に論駁してゆく。クザーヌスが『弁明』で反論しているように、この抽出はいささか不正確かつ恣意的なものであるが、ともあれ、それぞれの反駁の仕方には一定の傾向がある。纏めれば、(1) 諸概念の無区別、(2) 矛盾する表現、(3) 教えへの違反、に集約され、それらが (4) 真理観の対立

に収斂する。このヴェンクの批判点については、「異端の嫌疑」と「学知の解体」に大別するのが Haubst 以来一般的であるが⁹⁾、ここでは論駁のスタイルから纏めた上述の四つの区分によって、両批判点の所在に踏み込みたい。

(1) 諸概念の無区別

諸概念の未分化は決して認められない。「神」と「諸事物の総体」(テーゼ 1 (=T1))、「最大なもの」と「最小なもの」(T3C1)、「原初的なもの」と「像」(T4)、「可能態」と「現実態」(T5, T9C2)、「創造主」と「被造物」(T3C2, T9C2)、「創造」と「神の存在」(T7)、「太陽の何性」と「月の何性」(T7C2)、「キリスト」と「銘々の人間」(T10C1)、個々のペルソナ (T1, T6, T6C2) 等の概念を混同していることを理由に、これらが含まれるテーゼおよびコロラリーは棄却される。

ヴェンクから見れば、諸概念を混濁させて用いることが神と被造物とを同一視し、三位一体を廃する異端信仰という結果を招くのであり、エックハルトやベガルドの人々と同じ誤りを犯す要因となる。彼らは総じて、諸概念の区別を恣意的に消失させるゆえに、尊大な異端思想を展開することができるのである。

(2) 矛盾した表現

テーゼおよびコロラリーに矛盾が見られれば、それを指摘することで直ちに論駁を終えている。このタイプとしては、三位一体を棄却したうえで論じている (T1)、神を知解することを目指す一方で目指していないとも述べている (T4C1)、無知を教える (T4C2)、「万物であり万物のいずれでもない」(T5C1)、「賢さは愚かさ」「知恵は無知」(T5C2) 等の表現が挙げられる。ヴェンクにおいてこれらの矛盾的記述は、ただ「暗闇を歩き回る」(IL: 33, l.12) 混乱した状態に過ぎない。

(3) 教えへの違反

ヴェンクの学び知った教えと違っている、という理由で退けられるケースも散見する。カテゴリー論の無視 (T2C1)、アリストテレスの教義全体の破壊 (T3C1)、『形而上学』が維持されない (T5C3)、第一の

9) 八巻や島田もこれに準じるが、Ziebart は「神学」「認識論」「論理学」に分類する。

動者を廃している (T8C2), といったアリストテレスのテキストに違反するというものだけでなく, あらゆる哲学と相容れない (T7C3), 哲学者たちの意見と異なる (T8C1), 天に関する我々の知に反する (T9) といったこれまでに見知った教えと異なるということのみを根拠に, ヴェンクは論駁を完了させる。

このタイプは内容を吟味したうえで論駁するというよりも, 当代の大学の権威が教える事柄に違反するという理由で棄却している側面が強い。教えを軽視し, それらが維持されなくなるような事柄を語る『知ある無知』は, その崩壊を目論むものに映るのである。

(4) 真理観の対立

殆んど機械的に退ける (1) ~ (3) とは対照的に, 2人の立場が顕著に対立するのは真理観である¹⁰⁾。ヴェンクの主張を纏めれば, 次のようになる。神も諸事物の真理も, 正確ではないにせよ像と類似によって我々の知性に概念的に与えられている。従って, これらは比を用いて到達できる把握可能なものであり, 知の対象である。他方, 純正さにおいてこれらを見ることは神の国に属するため不可能である。

従って, ヴェンクから見れば, クザーヌスは神と諸事物との間に比は存在せず神を知りえないものと誤認し, 諸事物の真理もまた獲得しえない, すなわち知の対象となりえないと主張する点で学知を否定していることになる。加えて, 比から離れ純正さにおいてこれらを知解しようとしている点でクザーヌスは不遜である。そして, (1) (2) 同様, この点も「論理の訓練の不十分さが彼を誤りへと導いた」(IL: 24, 1.13) と彼は考える。

以上を纏めよう。まず, (1) 諸概念の無区別と (2) 矛盾する表現は, 「異端の嫌疑」に関わる。異端の温床は, 概念の区別を恣意的に混濁させて用いる (1) にあったが, それを基盤に (2) が展開される。他方, (3) 教えへの違反と (4) 真理観の対立は「学知の解体」への危惧に関わる。ヴェンクが学んだ教えの軽視, アリストテレスやその他の哲学者たちの言表を「気かけない」(IL: 22, 1.2) 態度を問題視しつつも, こ

10) 彼の真理観が特に明確なのは, T2, T2C2, T3 (IL: 27-29)。この論点に関しては, 島田 [2012] が詳しい。

れと併せて学知の崩壊をラディカルに招く (4) 真理観の対立こそが致命的であった。「もしこれら〔何性あるいは真理〕が獲得不能だとしたら、このような知性的な運動は向かう終点なくして向かっていることになり、この帰結から運動の目的もないことになる。また同様に、知性的な運動には終わりが無いことにもなるが、これは誤りである。そうであったなら、知性固有の働きは破壊されてしまうだろう」(IL: 29, 1.2) とあるように、ヴェンクにおいて知は必ず終着点を持ち、そうでなくてはその働きは意味をなさないのである。この点から、『知ある無知』が他の異端思想よりもいっそう悪しきものだと糾弾された¹¹⁾と考えられる。

1-3. ヴェンクにおける「空であれ」の内実

ヴェンクにおいて「空であれ」とはどのような内実を持ったのかを改めて考察しよう。(1) 諸概念の無区別は〈反対対立の一致〉を、(2) 矛盾した表現は「知ある無知」および「把握しえないものを把握しえない仕方であらざる」ことを受容しない態度に直結した。ヴェンクが考えるように、人間の有限な視点からは常に概念は区別されうる。だが、そうした概念領域を超えて無限なるものへと目を向けるよう『知ある無知』は促していた(DI: 1)。しかし、ヴェンクはこれを端的に誤りと見做す。我々の知を超えることは不可能であるうえに、思い上がった態度なのである。

(3) 教えへの違反から読み取れるのは、神学部教授らしいヴェンクの大学教育に対する信頼の深さである。「相容れない」(IL: 36, 1.19) という簡素な言表に留め淡々と論を締めくくる態度には、それらが傾聴するに値しない素人考えだという想いが読み取れる。こうした教えの軽視は(4) 真理観の対立に至り、決定的なものとなる。ヴェンクは比を用いて不確実なものを確実なものとする、獲得されていないものを獲得することへと意識を向け、このような営みこそが学知の基盤であると

11) 『知ある無知』がより悪質と見做されていることが窺える箇所として以下がある。クザーヌスは神が存在するという教えを破壊したとして「彼〔クザーヌス〕は、かつてのシュトラスブルクのペガルドたちよりも愚かである」(IL: 29, 1.31)、「私は、私の生涯を通じてこれほど憎むべき著作家〔クザーヌス〕を見たことがあるかわからない」(IL: 41, 1.)。

考える。この立場から見れば、真理を獲得できないという主張は、学知の否定となろう。人間の知の営みを無益なものとするクザーヌスの言表は、ヴェンクにとって許しがたいものである。

ヴェンクはクザーヌスを「好奇心と虚栄心へ向かって見ている」(IL: 20, 1.4), 「得意がらせる単なる知識的なものに留まっている」(IL: 20, 1.9)と批判したが、これはクザーヌスが彼から見て学知に疎くこれを軽視し、己の思考 *cogitatio* を徒に語るからである。ヴェンクは、知とは不確実なものを確実にしてゆくものであるという信念を持ち、そこには論理学および学知が根ざす。従って、ヴェンクにおいて「空であれ」とは、闇雲に自身の思考を展開してはならない、論理と大学の教えに忠実であれ、という内実を持つ。

2. クザーヌス『知ある無知の弁明』

『無知なる書』から約6年後、1448年12月に枢機卿に任命されたのちにクザーヌスは『弁明』を著しこれに応えた¹²⁾。この著作は、クザーヌスを師とする弟子が『無知なる書』について師と議論を交わしたのち、その内容を別の弟子に宛てた書簡という設定を持つが、実際は『知ある無知』『無知なる書』同様、マウルプロンの元修道院長に宛てられた。この形式は、ヴェンクへ宛てずに匿名性を保ちつつ、『知ある無知』を弁護することが意図されたゆえだとしばしば指摘されている¹³⁾。

『弁明』は、『無知なる書』を弟子が読み上げつつコメントを付し、それに師クザーヌスが順に応えるという仕方で展開する。構成は『無知なる書』に即し、主旨を述べる前半部とテーゼとコロラリーに言及する後半部とに分かれる。手紙という形式により、『無知なる書』に対する二人の率直な反応も描写される。ヴェンク同様に感情的な記述が見られる

12) K. Flasch は、枢機卿の地位を掴むにあたって応答するのは得策ではないと考え沈黙していたとみているが、Haubst は『無知なる書』が一般に読まれるものとして書かれたわけではないことから、1449年まで手にしていなかったと推定しており、Ziebart、八巻もこれに倣っている。『無知なる書』の入手経緯については、クザーヌス自身は言及しておらず、定かでない。Flasch, *Nikolaus von Kues: Geschichte einer Entwicklung*, Frankfurt, Vittorio Klostermann, 1998, p.184, Haubst[1955], p.112 参照。

13) 八巻は、この設定について『弁明』への直接的な説明責任を負う必要がないという利点を強調しているほか、『弁明』において自身をソクラテスに喩えたことから、『饗宴』の形式に似せたと推察している。[2001]p.26, [2016]p.218 参照。

が、弟子がヴェンクに怒り、憤る役割を担うのに対し、師クザーススは冷静かつ穏やかに弟子を諫めつつ対処する、という性格づけがなされている。

2-1. 『知ある無知の弁明』の主旨

1-3 で述べた「空であれ」の内実、闇雲に自身の思考を展開してはならない、論理と大学の教えに忠実であれ、というヴェンクの非難に対し、クザーススはどのように応戦したのか。彼は、論理偏重と権威主義への批判を行い真っ向からこれに対峙する。

クザーススは、自身をソクラテスに喩え己が無知であることを知る者とし、他方、当代の伝統と権威に縛られた神学者たちを己が無知であることを知らず、知を有すると己惚れる者として「盲目な者」caecus と呼ぶ (*Apologia doctae ignorantiae* (=AD) : 2-3, pp.1-2)。彼らは、「自分たちの指導者として身を立ってきた人々がしたような話し方を知るとき、自分が神学者であると考え」(AD: 3, p.2, l.24)、それを鼻にかける。肝要なのは、人知の限界点において「人間が何かを完全に知ることはできない」(AD: 3, p.3, l.15) という気づきであるが、彼らはこれを省みようとしないというのである。

クザーススの主張する真の神学とは、言葉や論理が及ばない領域に存する¹⁴⁾。推論ではその地点に到達することは適わず、正確に記述されることも不可能であるため隠されている。従って、論理的な考察や比を用いた推論からではなく、知性によってその隠されたものを隠されたものとして観ることこそが重要で、これを「知ある無知」として主張する。論理や哲学の研究は、この「知性の視覚」を持たない (AD: 21, p.14, l.24)。それどころか、「論理の過剰は最も神聖な神学にとっては有益というよりむしろ害悪」(AD: 31, p.21, l.11) でさえあるという。そのため、クザーススの立場からは、伝統や慣習から一旦離れ、沈黙し、把握不能なものが在ることを尊重して上昇する、すなわち、論理を超えて知性の目で眺めることが推奨される (AD: 30, p.20, l.16)。クザーススにしてみれば、「空であれ」はヴェンクにこそ投げかけられる言葉なのである。

14) 例えば、AD: 5, p.4, l.1。

このように、クザーヌスは、言葉や論理の次元すなわち理性的 ratio 領域とそれを超えて神を観る次元すなわち知性的 intellectus 領域を峻別したうえで、理性的領域に留まるアリストテレス主義が優勢の世にあっては、真の神学の端緒である〈反対対立の一致〉は異端と見做されてしまう、と嘆く (AD: 7, p.6, 1.7)。ところで、自説に異端の嫌疑がかけられた場合、それを退けるための弁明としては、自説がいかに異端でないかを申し述べることに主眼を置くのが筋であろう。ヴェンクが『知ある無知』を他の既に異端と確定した思想と同列に並べ、その中でもとりわけ悪しきものと断罪するのであるから、弁明として最短の道を取るならば、既に異端と確定したものと自説がいかに違うのかを論述すべきである。しかし、クザーヌスはそのような道を進まず、エックハルトをも擁護する¹⁵⁾。エックハルトは、「盲目な者」には誤解されるものであるから公開されるべきではないとするが (AD: 36, p.25, 1.9)、むしろ隠されたものとして高い価値が置かれている。異端が成立する背景には、それがすべてではないにせよ、理性的領域に従事する神学者たちがそれを超える言表を吟味、理解せずに糾弾していることがあると見ているのである¹⁶⁾。

2-2. クザーヌスによる弁明の要点

『無知なる書』のテーゼおよびコロラリー論駁への言及を纏めれば、要点は (1) 要約の不備、(2) 知性的領域への無理解、(3) 浅学であることの示唆に大別されるが、概ねひとつのテーゼに対し二つの要点が混在する。コロラリーに対する直接の言及は半分程度であり、テーゼ 8 以降はもはや「気に留めなかった」 (AD: 52, p.33, 1.26) として記述がない¹⁷⁾。本節では、個々の議論に立ち入るよりも上述の要点に絞

15) クザーヌスの他の著作ではエックハルトの名が直接記されることは少ない。

16) 尤も、『弁明』で直接擁護したのはエックハルトだけである。ベガルドの人々に関しては、「我々の論敵が主張したように本性において自分たちは神であると言うベガルドたちが居たならば、彼らは正しく非難されたということになる」と述べるに留まる。「知ある無知」なしに高次の真理を求めることの困難さを併せて説明し、異端思想に転じてしまう人々は、ヴェンクとは違い知性の目を持つがその視力が弱いために光によって盲目になるとして「知ある無知」の重要性を説いている (AD: 44)。なお、ロラード派、ウィクリフ派に関しては、ヴェンク自身もこれらを列挙するに留まり、兩人共具体的には言及していない。

17) 尤も、ヴェンクの側も『知ある無知』への言及は網羅的ではない。また、ヴェンク

り¹⁸⁾、クザーヌスが総じてどのように自説を異端ではないと示したのか、ということ概観する。

(1) 要約の不備¹⁹⁾

師と弟子が最も怒りを露わにするのが、このタイプである²⁰⁾。『知ある無知』のどこにも見られない表現を用いている場合、ないし一部分を切り取って曲解している場合が該当する。例えば、端的な異端思想として最も強い批判を受けた「神と被造物とが一致する」という記述は『知ある無知』にはなく、「〔ヴェンクは〕挫くためだけに読んでいる。(AD: 31, p.21, l.16)²¹⁾、とクザーヌスは断じる。また、記述を端折った結果、異端的な言表を切り取ることができたとしても、書き手の思想を俯瞰し一貫したものとして読むのであれば、それが誤解によるものだと明らかになると付け加えている (AD: 24, p.17, l.2)。このように、テーゼが適切な要約ではない以上、批判に妥当性がないことを示唆する。

(2) 知性的領域への無理解

この点は、殆んどすべての論駁に該当し、著作中で師が骨を折り、疲れ果てる要因となるものである。クザーヌスが促すのは、〈反対対立の一致〉によってヴェンクの留まる理性的領域から知性的領域へ超出ないし上昇することであるが、他方、ヴェンクは知性的領域を認めないため『知ある無知』を理解することはできない。

2-2 (1) (2) の批判点に見られるように、論理的な観点から直ちに偽と見做し退けるヴェンクには、「包含という仕方において神は万物であるが展開という仕方では神がこれらのいずれでもない」(AD: 47, p.31, l.27) ということや「神において万物は神」(AD: 39, p.27, l.4) ということの内実はわからない。このようなヴェンクの無理解の結果、図らずも正しいことを述べていることが指摘される場合がある。例えば、クザーヌスが「闇の中を彷徨っている」という中傷に対しては、神は闇の中で

の論駁自体も後半に進むにつれ簡素になる傾向があり、この点に関してはお互い様である。

18) 個々の論点については、佐藤 [2005] が対照したうえですべてを要約しており、詳しい。

19) Hopkins[1994] は、この争点に関しヴェンクを或る程度擁護する立場を取っている。

20) このタイプの弁明には、T1, T4, T7 が該当する。

21) ほか、AD: 52, p.34, l.11 等、文意を理解していない点は総じて度々言及される。

観られるとし、この言表は正しいという。1-2 (4) 真理観の対立もここに含まれる。「〔正確さが〕把握されえないのであれば、知ある無知においていかなる正確さが観られうるのか」という批判には、正しく述べていると答える。正確さが観られえないということを知ることが「知ある無知」だからである。従って、「盲目な者」は「知ある無知」に無理解であるため、これらは批判されていないに等しく、その批判さえも「正しく述べている」と語りうるのである。

(3) 浅学であることの示唆

クザーヌスは、ヴェンクが存外浅学である点も仄めかしている²²⁾。例えば、「神はこのものではないし、いかなる他のものでもなく、万物であるが、しかし万物のうちのいずれでもない」(T5C1, AD: 46, p.31, l.23) に対し、「矛盾が含まれる」(IL: 33, l.1) とヴェンクはこれを退けたが、この箇所はディオニシウスからの引用であることを指摘する。ヴェンクは聖人の言葉であることを知らずに批判しているというのである。

文献蒐集家としても知られたクザーヌスは、アリストテレス以外の典拠を用いることが殆んどないヴェンク²³⁾とは対照的に、様々な典拠を積極的に挙げ論じる²⁴⁾。クザーヌスが先人の教えを蔑ろにしているわけではないにもかかわらず、立場ある者がそれに気づかないことに呆れてみせるのである。ヴェンクはクザーヌスが「古代の本を未消化のまま様々に通読した」(IL: 34, l.16) と推察したが、クザーヌスは、具体的に典拠を示すことで、自身に向けられた印象の払拭を試みる。そして、己の思考を闇雲に展開させた結果生まれた新奇の説を提示したのではなく、それら書物と親和するものとして、自説の正統性を主張する。

以上を纏めれば、テーゼとコロラリーへの応答は、要約自体に非難のための恣意的な曲解があり、『知ある無知』の内容を理解していないうえに、ヴェンク自身の浅学さゆえに批判は聖人にまで及ぶ尊大なものと

22) このタイプには、主に T4, T5, T6 が該当する。

23) この他の引用は、アリストテレス偽書『原因論』、ベトルス・ロンバルドゥス『命題集』各一ヶ所ずつに留まる。

24) アヴィケンナ、プラトン、アウグスティヌス、アルガゼル、ヘンリクス・バテヌス (Henricus Batenus <Mechliniensis>), アンプロシウス (登場順) 等。例えば, AD: 30, p.20, l.21, AD: 52, p.34, l.15.

なっているというものである。

2-3. クザーヌスにおける「空であれ」の内実

そもそも『知ある無知』は何を教えていたか。「知ある無知」とは、端的に言えば、神が知られえないものであることを知る、あるいは把握不能であることを知性によって観ることである。〈反対対立の一致〉は、知性が「把握不能なものを把握不能のままに抱擁する」ための装置であり、矛盾律を超えるものである。それは、推論、言語、概念が機能する場を超えてそれらがもはや機能しないままに、神を観させ、触れさせ、抱擁させる。

つまり、理性的領域は有限な事柄に留まるが、知性的領域は神であるところの無限へと開かれている。しかし、有限と無限の間に比は存在しないため、我々は無限を把握しえないものとして観るに留まる。理性的領域にのみ従事し、矛盾を矛盾として棄却するヴェンクは〈反対対立の一致〉の観点を持ちえないゆえに、むしろ有限な事柄に神を陥れている(AD: 13, p.10, l.13)。クザーヌスにおいては、これが不敬虔な態度なのである。

ヴェンクの危惧に反して、クザーヌスは理性的領域を破壊しようとしているのではない。彼の意図は、矛盾律の破壊ではなく、推論の中止ないしそこから離脱にある(AD: 20, p.14, l.16)。肝要なのは、比を超える領域を認めることであり、目指されるべきは乗り越えである。彼は、理性的領域に関しては、それが人間に本性的に備わっているものとし(AD: 21, p.15, l.3)、退ける立場を取らない。比が機能する領域では、存分にそれを用いるのが当然であり、そこでは区別の混濁も生じない。このように、ヴェンク的な知が展開される場は担保されているのである。但し、その理性における知の領域をいかに拡張しようとも、諸事物の真理も神も獲得されえないことが肝要である。「知ある無知」を掲げるクザーヌスの知は、このようにヴェンクとは次元を異にしている。クザーヌスの知への態度は、理性的領域圏内の未だ知らないものではなく、それを超えた決して知られえないものに向かう態度なのである。

以上より、クザーヌスにおいて「空であれ」とは、まず、論理と大学の教えあるいはアリストテレス主義から離れよ、という内実を持つ。論

理や言葉が機能しなくなることを「空」と捉えるのである。この意味で〈反対対立の一致〉が受容されることは、「空」となる。従って、より正確には「空であれ」とは理性的領域を超えよ、あるいは知性的領域に上昇せよ、という内実を持つと読み解くことができる。また、「そして見よ、私は神であるのだから」は、ヴェンクが神と被造物との区別の根拠にしたのに対し、クザーヌスでは、対象は神なのだから「空」という仕方でもこそ観ようとするのでなければならない、と解釈されていると考えられる。

結. ヴェンクとクザーヌスにおける知的態度の差異

二人の争点を纏める。ヴェンクにおいて、〈反対対立の一致〉も「知ある無知」もそれ自体矛盾を孕む表現であるから、退けられねばならなかった。〈反対対立の一致〉からは被造物と神との一致という汎神論的異端思想が読み込まれ、そこから展開された「知ある無知」は学知の崩壊をも目論むものと捉えられた。それゆえに、『知ある無知』はいっそう害悪な異端書とされたのである。他方、クザーヌスからみれば、これらの批判は理性の領域を超え出ることへの無理解に起因しているものであり、論理学と哲学の伝統的な研究にのみ従事するヴェンクの営みがかえって真の理解を妨げていることになるのである。『知ある無知』は汎神論を説くものではなく、学知の崩壊を目指しているのでもない。

二人が明確に対立したのは、真理観であった。確かに、ヴェンクは神と被造物との間に比を認めるが、クザーヌスはこれを認めないという点で、両者は対立している。しかし、純正さにおいて真理が獲得されることはない、とする点で彼らの見解は一致している。両人は、比によって獲得されるものを真理と呼ぶか否かで対立しているのである²⁵⁾。ヴェンクは未だ知られないものへと向かい、クザーヌスは決して知られえないものへと眼差しを向けている。二人の違いはこの点にあった。

「空であれ、そして見よ、私は神であるのだから」という命令は、互いの解釈に基づき投げかけられ、二人の知的態度を際立たせた。ヴェン

25) この見解は、佐藤 [2005]、八巻 [2001][2016] 等に共通するものである。

クにおいて、この言葉は、闇雲に自身の思考を展開してはならない、論理と大学の教えに忠実であれ、そしてそのような仕方では比的に神を把握せよという内実を、他方、クザーヌスにおいては、論理と大学の教えに固執してはならない、理性的領域を超えて神を観よ、という内実を持った²⁶⁾。

凡例

——『無知なる書について』については以下を使用した。Jasper Hopkins, *Nicholas of Cusa's Debate with John Wenck, a Translation and an Appraisal of De Ignota Litteratura and Apologia Doctae Ignorantiae*, Mineapolis, A. J. Banning Press, Second edition, 1984.

なお、同書に Hopkins による『無知なる書について』および『知ある無知の弁明』の英語訳が収録されており、訳注を含め参照した。また、訳文には拙訳「【翻訳】ヨハネス・ヴェンク『無知なる書について』翻訳前編」『上智哲学誌』第 31 号、上智哲学誌編集委員会、2019, pp.41-55, 「【翻訳】ヨハネス・ヴェンク『無知なる書について』翻訳後編」『上智哲学誌』第 32 号、上智哲学誌編集委員会、2020, pp.25-40 を用いた（後編は第 32 号に投稿予定）。

——『知ある無知の弁明』については以下を使用した。*Nicolai de Cusa Opera Omnia*, iussu et auctoritate Academiae Litterarum Heidelbergensis ad codicum fidem edita, Vol.II, edidit Raymundus Klibansky, Hamburgi in aedibus Felicis Meiner, 2007.

26) なお、Haubst[1936] pp.102-103 によれば、現存しないものの、ヴェンクはこの『弁明』について再度 *De facie scolae doctae ignorantiae* を著し、意見を残したという記録がある。そこでは、態度を軟化させ、異端ではないがディオニシウスを誤読しているという指摘に留めたということである。一方、クザーヌスは、よく知られるように、翌年『無学者考』(*idiota*, 1450) 三部作を書き上げた。大学という場から距離を取りつつ神探究の担い手を素人に委ね、独自の思考を展開する道を選んでいる。この点については、Ziebart[2014] pp.105-134 が詳しい。八巻 [2016] pp.206-215 では、いずれにも言及がある。